

No. 120 June 1996

百万石蝶談会

BITU



石川県小松市で発生したカバマダラ

森 正 俊

《最初の発見》

1995年8月24日、小松市向本折共同墓地南側の畑地で、新鮮な1♀を採集した。住宅地に近い畑地で、耕作地は宅地程の大きさに区切られ、花や各種露地野菜が作られている。ビニールハウスで施設野菜も作られているが、全く放棄されている場所も点々とある。

珍しい蝶なので調査を続けていると、8月30日には24日の地点から150m離れた今江の畑地で新鮮な1♂を採集した。また、同日今江の市街地でも1頭目撃された。

1995年8月24日	小松市向本折	1♀採集	森 正俊
1995年8月30日	小松市今江	1♂採集	森 正俊
1995年8月30日	小松市今江	1頭目撃	橋 鉄男

それからは仕事も手に付かず、毎日のように発見地のような環境を捜して、南は加賀市塩屋から北は松任市までを調査した。しかし、その後は全く発見できず、9月10日を最後に調査を終了した。

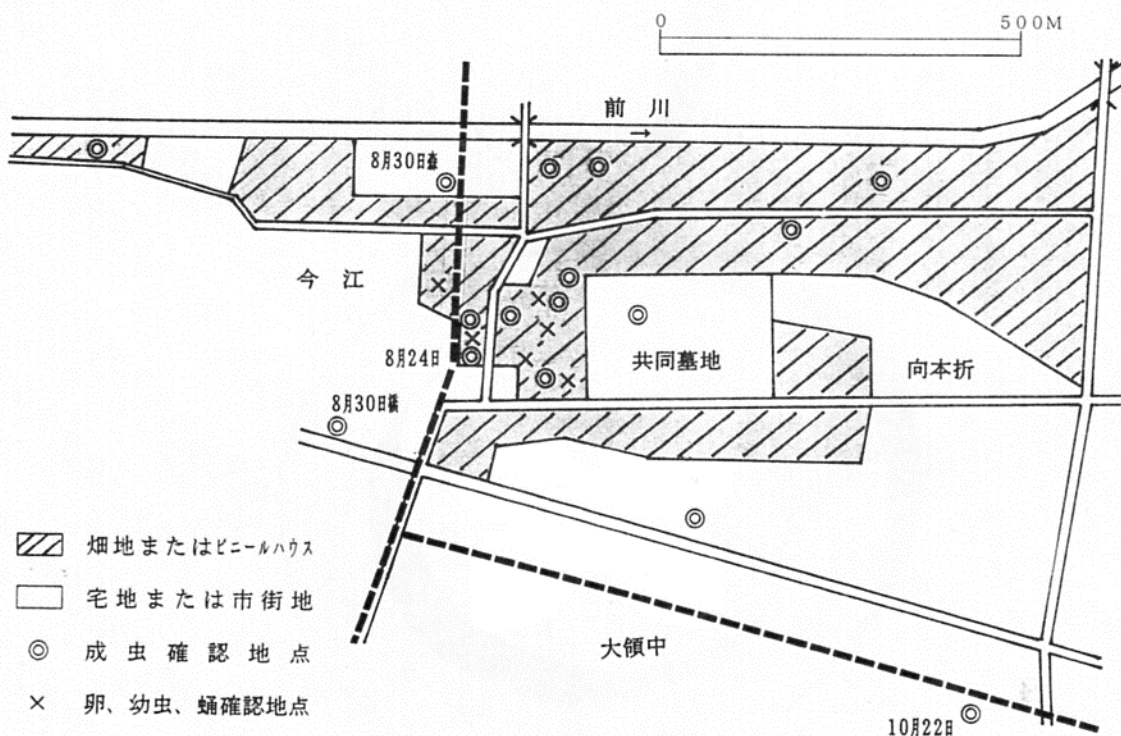


図-1. 発生地の概略図

《大発生》

10月22日、古くからの虫友から突然「庭にカバマダラがいる」と連絡が入る。急いで駆け付けたが飛び去った後だった。それではと8月の採集地に行くと、そこには2♂1♀が飛んでいた。その後、晴天時には同地で多数のカバマダラが舞い、さながら南国状態となった。

1995年10月22日	小松市大領中	1頭目撃	瀬川保和
1995年10月22日	小松市向本折	2♂1♀目撃	森 正俊
1995年10月27日	小松市今江	1♂2♀目撃	森 正俊
1995年10月28日	小松市向本折	35頭以上目撃	森 正俊・他

《卵・幼虫の発見》

カバマダラが乱舞する付近には放棄された耕作地があり、ここからガガイモが見つかった。10月29日に松井正人氏が2卵1幼虫を発見したのを皮切りに、卵や各齢の幼虫が多数発見された。ガガイモの群生地は発生地周辺約8haの畑地の中に何箇所もあり、そのほとんどから幼虫を発見することができた。

1995年10月29日	小松市今江	2卵初齢1幼虫採集	松井正人
1995年10月30日	小松市向本折	各齢幼虫多数採集	森 正俊・他
1995年10月31日	小松市向本折	各齢幼虫多数採集	森 正俊・他
1995年11月3日	小松市向本折	卵各齢幼虫多数目撃	森 正俊・他

《野外観察》

幼虫の発見時、既に最低気温は6度まで下がっていた。11月に入ると天候も不順で、1日からみぞれ交じりの雨やあられも降りだしたが、天気の良い日中にはフワフワ飛ぶ成虫や日向ぼっこしている幼虫が見られた。日増しに寒さが深まる中、成虫の終見は11月12日、幼虫の終見は11月18日となった。蛹だけはどれだけ捜しても発見できなかったが、11月11日に地表近くで前蛹を発見し、そのまま観察を続けると、14日に蛹化し、28日になっていくぶん色付いてきた。12月9日には、つるだけになったガガイモの地上30cm程から、新たにグリーンの蛹を1頭発見したが、16日には鳥にでも食べられたのか消えていた。

1995年11月12日	小松市向本折	2♀目撃	森 正俊・他
1995年11月14日	小松市向本折	1蛹目撃	森 正俊
1995年11月18日	小松市向本折	2終齢幼虫採集	松井正人
1995年12月9日	小松市向本折	1蛹目撃	森 正俊



写真-1. 地表近くの蛹（11月18日）

《飼育観察》

あまり温度をかけず、自然に近い温度で飼育した。1～2 齢幼虫は葉に丸い穴を空けるように食べ、2 齢後期になると葉脈をちよっとかじった後葉縁から食べるようになった。葉の味も分かるかのようで、少しかじって別の葉に移ったり、1 枚総てを食べてしまったりと色々だったが、肉厚の葉は好まず、枯れぎみでも薄くてやわらかい葉を好んだ。

3 齢以上の幼虫になると、他の幼虫が触れると頭部と尾部をすばやく反らして全身を振る行動をとった。また、幼虫の体色には2 種類あり、黄色の縞模様が細く薄い幼虫と太く鮮やかな幼虫がいた。

蛹化は、室温18℃程度で約9 時間で完了した。尾部を固定してから3 時間程で縞模様が薄くなり、少し緑色がかってきた。6 時間後には3 対の肉質突起は体の中にすいこまれ体は透き通るような緑色になり、8 時間後に脱皮し、9 時間後に金色の筋が表れた。この蛹にはピンク系とグリーン系があった。また蛹は、水をはじく独特の油を出しているようで、霧吹き実験では7 日～10 日間は効果がみられた。

11月15日に1 ♂、11月18日に1 ♀、20日に1 ♂が羽化した。15日の最高温度は18℃で、18日と20日は16℃だった。その後11月24日にも1 蛹の背が割れ、羽化の兆しはあったが羽化できなかった。24日の最高温度は13℃より上がらなかった。羽化した成虫もほとんど動かず、止まっているのがやっとなような状態なので、室内温度を17℃まで上げたところ、パタパタと飛びまわった。

数人で、各齢の幼虫多数を採集し羽化させたが、寄生と思われるものは蛹に穴があいた1 頭だけだった。

《おわりに》

寒くなり始めた11月初め、産卵された卵が野外でどんどん孵化していた。各齢の幼虫もたくさんいた。暖冬だったら越冬するかも知れない。桜の季節には、カバマダラが飛ぶかも知れないと分かっているが期待もしていた。気温が下がり、やっとの思いで生きている幼虫、いつしか葉が枯れ茎だけになったガガイモを見るにつれ、当然と言えば当然の成り行きに寂しさを感じている。唯一残った蛹はいつまで持ちこたえるのだろうか。哀しい結末は目に見えているが、頑張れと声援を送りつつ、観察報告を終えたい。

最後に、この新しい発見によって地区の人達が生物への興味を抱き、自然環境の存続へとつながれば幸いである。

今回の報告にあたり、多くの方からご協力いただいた。常日頃よりご指導いただいている中山佐一郎氏、有益な助言、調査への協力など数々のご支援をいただいた、国分五男、瀬川保和、富沢 章、橋 鉄男、松井正人、矢田新平の各氏に心からお礼申し上げる。

《もり まさとし 〒923 小松市丸の内町1-5 小松昆虫館》

石川県押水町で発生したカバマダラ

松 井 正 人

《はじめに》

日本海に突き出た形の石川県は長い海岸線を有し、アオタテハモドキ、メスアカムラサキ、リュウキュウムラサキ、カバマダラ、スジグロカバマダラ、ウスイロコノマチョウ等の迷蝶が飛来している。この中のウスイロコノマチョウは最近頻繁に確認されるようになってきたが、カバマダラの発見は1969年以来26年ぶりで、発生は初めて確認された。

《発生地での発見》

1995年10月14日、押水町北川尻の公園でボロボロになったカバマダラ1♀を採集した。付近を調査しようとチガヤ原に踏み込んだところ、交尾中の2頭を含めた3頭が飛び上がった。足元を見ると、チガヤに交じってガガイモが見える。屈み込んだと、円痕やV痕、葉脈の噛傷等アサギマダラに似たような食痕がある。茎だけになってしまったガガイモもたくさんあり、チガヤに埋もれた小さなガガイモから初齢幼虫が見つかった。その後、多数の卵や幼虫が見つかったが、蛹だけは発見できなかった。また、屈み込んで幼虫を捜している時に、ふと気がつくと羽化したてのようなカバマダラが4~5回飛んでいたが、今ここで羽化したのか、どこからか飛来したのか分からなかった。

1995年10月14日 押水町北川尻 4♂4♀卵幼虫多数採集 松井正人

《発生地の様子》

海岸線から 800m程離れた何もない水田地帯に、1ヶ所だけこんもりとした神社林があり、ここを取り巻くように公園が整備されている。この公園はあまり管理されていないのか、一面のチガヤ原で、内陸側の一角にはガガイモが有り発生地となっていた。チガヤ原の中には刈られたチガヤがあちこちに積まれていたので、年に1度は草刈りされているらしく、ガガイモの茎も地際で切られ、現在あるものは脇芽が伸びたものだった。

《2次発生地》

発生地の公園を中心に付近を調査したところ、川の土手や農道脇にガガイモがあり、その内の3か所から卵や幼虫が見つかり、成虫もその付近で見られた。しかし、ガガイモの量の割には卵や幼虫の数が少なく、また茎だけになったガガイモも見られないので、公園が1次発生地となり、その他は公園から始まった2次発生地と思われる。この2次発生地が見られたのは、1次発生地の公園を中心に半径400mの範囲だった。

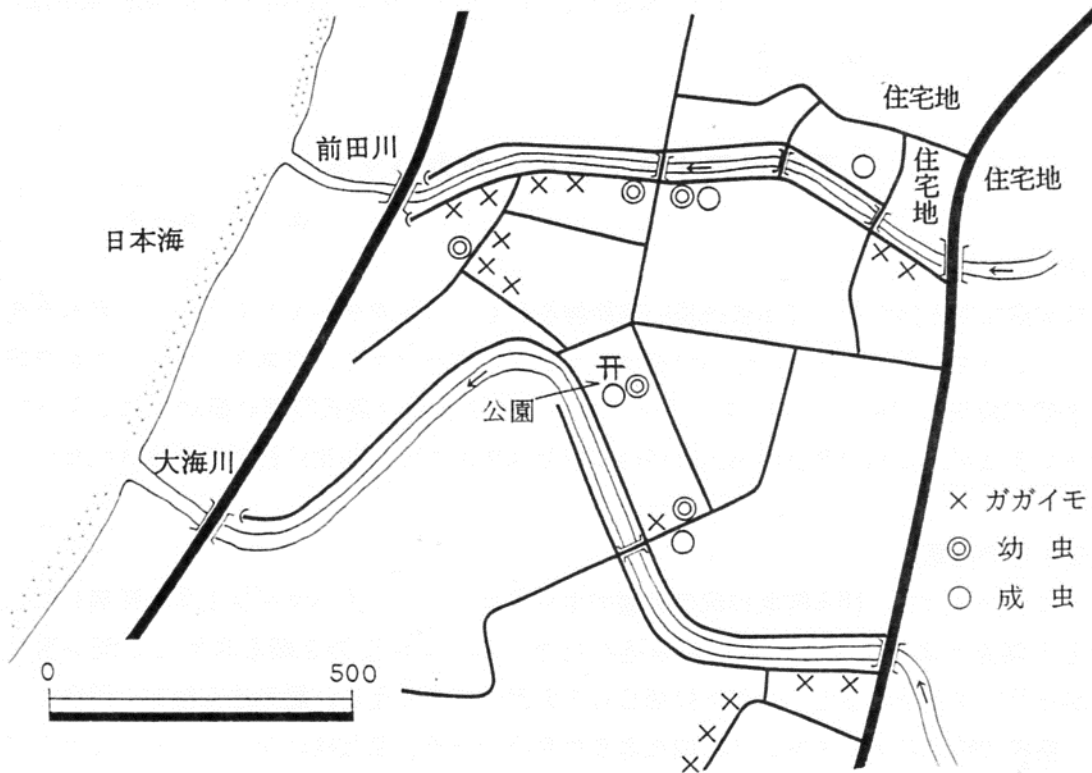


図-1. 発生地付近図

《発生地（公園）における成虫の行動》

成虫は気温が上がる10時頃より活動を始め、11時頃まではひ♀ともに発生地に多く、ウォーミングアップでもしているかのようにちょっと飛んでは長く止まっていた。11時を

過ぎると早は飛び去り、みは早を捜しているかのようにほとんど止まらなくなり、止まってもすぐに飛び立った。そのうちみも飛び去ったが、時々飛来した。2時頃になってみが飛来し巡回を始めたが、寒さの為か4時にはいなくなった。

発生地には、ノコンギク、セイタカアワダチソウ、アキノノゲシがあり、成虫はいずれからも吸蜜していた。

キチョウ、ウラギンシジミ、ヤマトシジミ、ヒメアカタテハ、キタテハ、チャバネセセリも発生地に見られ、ヒメアカタテハはカバマダラに特別な興味を示していた。ヒメアカタテハは、カバマダラのスピードに合わせゆっくりと追尾し、カバマダラが止まるとその横に止まった。カバマダラは逃げ回っているようでもなく、追尾、静止の行動は何度か繰り返された。まるで求愛のようなこの行動は3回見られ、その内の1回はみのカバマダラが追尾されていた。



写真-1. アキノノゲシで吸蜜するカバマダラ

《卵と幼虫》

卵は総て葉裏に1卵ずつ産まれていた。2卵産まれているものも1葉あったが、大きく離れているので、別々に2度産まれたものと思われる。調査時に、つぶれている卵がいくつか目に付き、それらを除いた26卵を14日と17日の両日で採集したところ、その中の16卵もつぶれてカビが生えてしまい、孵化したものは10卵だった。

発見した幼虫は、ほとんどが初齢と2齢で、3齢は2頭、4齢は1頭だった。初齢から3齢までの幼虫は食痕のある葉裏で発見したが、4齢幼虫だけは日光浴をしていたのか、食痕のない葉表で発見した。卵、幼虫ともに貧弱な葉、より低い所にある葉に多く、肉厚の葉や膝丈以上の葉からは見つからなかった。

《室内飼育》

飼育用に持ち帰った幼虫の内、3齢と4齢の幼虫各1頭からは、蛹化後数日して寄生蠅がそれぞれ1頭ずつ出てきた。

室温が10℃まで下がる暖房しない室内で卵から飼育をしたところ、幼虫期は21日だった。しかし、蛹化後30日を過ぎても羽化の兆候を示さず、最高室温も13℃以上に上がらなくなったので、蛹を20℃前後（17℃～23℃）の保温器に入れたところ、7日後に1♀が羽化した。羽は伸びなかった。同じように3頭を飼育していたが、保温器に入れるまでの日はそれぞれ違うものの、保温器に入れた8日後に1♀、9日後に1♀が羽化し2頭共羽化不全だった。孵化時から同様の保温器に入れたものは、順調に成育し正常な個体が羽化した。羽化個体の中には、前翅先端部の黒紋の中に薄く赤い鱗粉が載る個体もあった。

	孵 化	2 齢	3 齢	4 齢	終 齢	蛹 化	加 温	羽 化	幼虫期	蛹 期
日付	10. 18	10. 20	10. 23	10. 25	10. 29	11. 8	12. 8	12. 14	21	36日以上

表－1. 暖房しない室内での飼育記録

《発生経過》

10月14日には、傷みの激しい成虫1♂2♀と新鮮な成虫3♂2♀、卵、初～4齢までの幼虫を発見した。また、先端部に数枚の葉を残した、ほとんど茎だけのガガイモもたくさん発見した。同17日には少なくとも4♂2♀を発見し、1♀は傷みが激しくやっと飛んでいるようだった。同21日には成虫2頭と卵、初～3齢までの幼虫を発見した。その後は11月11日まで調査ができず、11日には公園のガガイモに葉は無く、2次発生地にわずかに緑の葉は残っていたが、成虫、卵、幼虫ともに発見できなかった。

傷みの激しい成虫と新鮮な成虫は2世代と考えるのが妥当で、ガガイモの状態や幼虫の発見から、新鮮な成虫はこの地で発生したと思われる。では傷みの激しい成虫は飛来したものだろうか。もし飛来したとすれば産卵期間は短いので、次世代が卵、幼虫、成虫と幅広く存在することは考えられず、やはりこの地で発生したと考えられる。

そこで、以下のような仮定を立て、発生経過を予想すると（図－2）、10月14日には傷みの激しい第1化成虫と新鮮な第2化成虫、第2化幼生期の各ステージが見られることになった。

- 仮定 1) 母蝶の飛来は8月15日、産卵は10日間。
 2) 第1化幼生期は20日。
 3) 第2化幼生期の初期は35日。
 4) 成虫は30日間生存し、産卵は羽化5日後から15日間。

	8月10日	8月20日	8月30日	9月10日	9月20日	9月30日	10月10日	10月20日
母蝶産卵		=====						
第1化幼生期		=====	=====	=====				
" 成虫期				=====	=====	=====	=====	
第2化幼生期				=====	=====	=====	=====	=====
" 成虫期							=====	=====
第3化幼生期								=====

図-2. 発生経過予想

《まとめ》

- 1) 1995年10月14日押水町北川尻でカバマダラの卵、幼虫、成虫を発見した。
- 2) 食草はガガイモで、円痕やV痕、葉脈の嚙傷等は、アサギマダラに良く似ていた。
- 3) 4齢幼虫1頭は食痕のない葉表にいた。
- 4) 採集時3齢と4齢の幼虫から、蛹化後寄生蠅が出てきた。
- 5) ヒメアカタテハがカバマダラに求愛行動と似た行動をとった。
- 6) 8月15日頃に飛来し、2化したと考えられる。
- 7) 1次発生地から半径400m以内に3か所の2次発生地があった。
- 8) 孵化率は10/26、38%と悪かった。

《さいごに》

今年は、小松市でもカバマダラの発生が確認されている。発生地は数箇所あり、多数の卵、幼虫、成虫が確認され、発生規模は押水町の数倍に及んでいる。8月下旬から成虫が確認され、これが第1化だろうと思われる。となると、8月中頃に押水町に飛来産卵したのは、小松市の第1化成虫の可能性がある。まず小松市で発生し、子孫が各地に広がった。その中に押水町もあり、たまたま発見されたと考えるのが自然ではないだろうか。そうなれば、押水町以外にもいくつかの発生地があったと思われ、それらは発見されずに消滅したのだろう。

おそらく毎年迷蝶が飛来し、中には発生を繰り返すものもいると思われる。しかし、発見されるものは極一部で、そのほとんどは人知れず消えていく。異国の地で発生を繰り返す迷蝶の頼もしさとはかなさ、蝶にとっては発見されるのは迷惑かも知れないが、それを発見し、記録に残すのが我々の責務のように思える。

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

カバマダラの飛来要因と発生経過を探る

富 沢 章

1995年に小松市でカバマダラが一時定着したことは上記のとおりであるが、私は飛来方法および発生経過について推察してみる。

《成虫飛来は7月下旬》

小松市でカバマダラ成虫が採集されたのは、8月24日の1♀が最初で、次いで8月30日に1♂を採集、さらに同日に1頭が目撃された。石川県では飛来の可能性の低い本種が同じ所でほぼ同時期にしかも新鮮な個体が採れたことから、これらは遠方の発生地からの飛来個体ではなく、同地で羽化した成虫である可能性が高いと考えるのが妥当である。

それでは飛来個体はいつ来たのだろうか。8月下旬に採れた成虫が第1化だとすれば、飛来成虫は7月下旬に到達したと思われる。その理由は夏期の高温期のカバマダラは卵から羽化に至るまで約20日間要し、成虫の産卵前期間（5日間と仮定）を含めると成虫飛来から第1化の発生まで約25日と推定されるからである。

《梅雨前線に乗って飛来》

迷蝶（迷虫）の飛来する要因については、台風が良く知られている。しかし、宮田（1992）は国内の偶産蛾と気象の関係を調べた結果、台風のほかに①梅雨前線上の南西風によって運ばれるもの②大陸や東シナ海で発生した低気圧によって運ばれて来るものも台風と匹敵するくらい頻度の高いことを明らかにしており、この3要因で偶産蛾の約90%は説明できると言う。

ところで、今回のカバマダラの飛来は梅雨前線との関係が深いようである。ここで7月の梅雨前線の活動をふり返ってみよう。県内で梅雨前線が活発化したのは7月8日、11～12日、16～17日、21～22日の4回である。このうち、集中豪雨等で降水量が特に多かったのは8日と21～22日であった。また、毎年、中国本土から梅雨前線に乗って大量飛来する害虫のセジロウンカは、県の病虫害防除所の調べによると、7月21～22日に極端に多く、次いで8日、16～17日であり、11～12日にはほとんど飛来しなかった。これを裏づけるように、前線が中国大陸から長く延び、北陸まで達しているのは図-1の天気図に示したように、7月20～22日だけであった。したがって、カバマダラの飛来も7月21日前後の可能性が最も高く、セジロウンカと同様、この時に前線南側の強風域（下層ジェット気流）に乗って飛来したのだろう。そして、飛来した1～2日後の7月23日は事実上、北陸地方の梅雨明けとなり、夏型の好気象が続き、その後の本種の発生に好影響を与えたと考えられる。

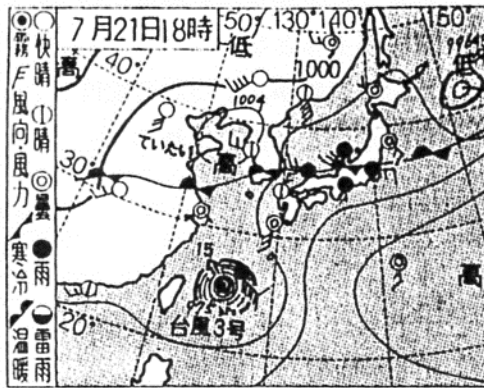


図-1 1995年7月21日の天気図

《飛来源はどこか》

それでは飛来源がどこか推察してみると、セジロウンカと同じく梅雨前線の西端である中国大陆の華中方面が考えられる。華中には本種が北限に近いながらも分布するし、セジロウンカとともにジェット気流で運ばれてきた可能性がある。もう一つの考え方は、ちょうど21～22日に南西諸島を通過した台風3号がヒントになりそうである。東シナ海を北上したこの台風から湿った強い南西風が梅雨前線に吹き込んだことから、南西諸島のカバマダラがこの風に巻き込まれてジェット気流に乗ったのかも知れない。

いずれにしても、今回のカバマダラは飛来源を特定できないが、梅雨前線の下層ジェットに運ばれた可能性が高く、今後、西日本で同様なケースがなかったかどうか注意する必要がある。なお、押水町における本種の発生も同様なケースかも知れないが、発生量が少ないことから小松からの二次飛来とも考えられる。

《3世代を繰り返す》

以上の仮説をもとに小松における発生経過を推察する。本種は夏期の高温期（平均気温25℃以上）では1世代に約20日間要すること（藤木、1973）、12～25℃が発育適温と考えられることから、1世代に要する有効積算温度を算出すると約280℃（ $(25^{\circ}\text{C}-11^{\circ}\text{C}) \times 20\text{日}$ ）となる。仮に成虫飛来日を7月21日、産卵前期間を5日間（7月22日～26日）とし、その後の有効温度を積算（ $\Sigma(\text{日平均気温}-11^{\circ}\text{C})$ 、ただし日平均気温は25℃を上限とする）すると、280℃に達するのは8月15日で、この日が第1化の成虫発生ピークとなる。同様に算出すると第2化は9月11日頃が、第3化は10月24日頃が成虫発生ピークとなる。また、第1化の発生量は、飛来成虫が常識的には1頭と思われるので、少なかったと推察されるが、第3化は大量発生していることから第2化はその中間的な発生量であったと考えるのが妥当であろう。しかし、第3化の発生ピーク後の11月初旬には真冬並の強い寒気が入り、荒れ模様の天気となったため、かなりの成虫が死滅したものと思われる。以上のことから、

全体の成虫発生消長は図-2のように経過したと想像される。とすれば10月22日から28日に観察された多数の成虫は第3化が主体となる。

以上の推論は、仮説の上に立った仮説ゆえ1つの可能性としか言えないが、今から思えば9月から10月の継続した観察のないのが惜しまれる。

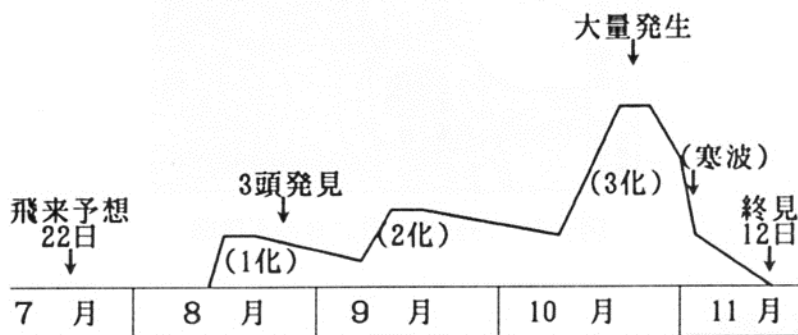


図-2 カバマダラ成虫の発生消長 (想像図)

《可能性の低い大量発生》

梅雨前線などで運ばれる昆虫は数から言えばウンカ類が圧倒的に多いが、トンボ類、カメムシ類、鱗翅類など多岐にわたることが東シナ海の定点気象観測船等によって確認されている(桐谷, 1984)。しかし、日本にたどり着けるのはごく少数であり、ほとんどは東シナ海や日本海に落下したり、死滅するものと考えられている。今回のカバマダラの場合、たとえ陸地に到達できたとしても、成熟または成熟に近い卵を持った雌であること、産卵する余力があること、発生に適した気象条件であること、近くに豊富に食草があること、成虫の吸蜜植物があることなど、10月下旬の大量発生に至るまでには様々な障害のあったことが予想される。そう考えると1頭であろうと思われる飛来成虫はとても運の良い個体で、我々に大きな驚きと感動を与えてくれた。

最後に、現地の発生状況を逐次教えて下さった森正俊氏、本種に関する文献を提供して頂いた松井正人氏、カバマダラの分布について教えて下さった指田春喜氏、セジロウンカの飛来情報をご教示頂いた県病虫害防除所の桂木氏に厚くお礼申しあげる。

《参考文献》

藤木秀大, 1973. 一時定着したカバマダラの生態観察, 月刊むし, (23): 18-23.

桐谷圭治, 1984. 移住する昆虫5, インセクトリウム, 21(6): 4-11.

宮田 彬, 1992. 動物たちの地球, 週刊朝日百科78, 朝日新聞社.

《とみさわ あきら 〒923 小松市大川町3丁目71》

1969年に採集されたカバマダラについて

松井 正人

1995年に小松市と押水町で多数のカバマダラが発生したが、1969年にも美川町で多数のカバマダラが確認されている。1995年は卵や幼虫の発見から、この地での発生が確認されたが、1969年に発生はあったのだろうか。

このことを報ずる文献の一部を原文のまま掲載するとともに、発生の有無を考えてみたい。

文献1) 石川県理科教育センター (1969) カバマダラ. 所報, (18): 1.

「9月19日、美川町蝶屋小学校の安田教諭らによって北陸では初めて発見された。

これまでに5♂、3♀が採集されている。また28日には野々市町でも1♂が捕えられた。当地で羽化したものと思われるが、たいへん珍しい例といえる。」

文献2) 大谷道彦 (1971) 石川県下でカバマダラを採集. 蝶と蛾, 22 (1/2): 56.

「採集された個体は新鮮なものであり、前翅長は36mmであった。…」

1♂, 石川県石川郡野々市町菅原町, 28. IX. 1969, 大谷道彦採集」

文献3) 武藤 明 (1971) 石川むしの会特別報告第2号 石川県の蝶相. 14pp.

「1969年9月19日に美川町蝶屋小学校校庭の花壇で小佐勝章君により4頭が採集されたのに始まり5♂♂3♀♀が得られ、更に9月28日には野々市でも1♂が採れたという。⁷²⁾ 狭い地域に9頭もの個体が見出された事は、奇異という外ない。」

72) 石川県理科教育センター (1969)

これらからはっきり分かる事は、

1969年9月19日 石川郡美川町蝶屋小学校校庭花壇 小佐勝章 4頭採集

1969年9月28日 石川郡野々市町菅原 大谷道彦 1♂ (新鮮) 採集

はっきりしないが想像できる事は、

9月20日～27日に蝶屋小学校付近で4頭が採集され、9月19日の4頭と合わせて5♂3♀♀が採集された。

蝶屋小学校は海岸線から約1.5km、野々市町菅原は蝶屋小学校から東北東約12kmにあり、どちらも金沢平野に位置している。これらから、蝶屋小学校付近に発生地があり、ここで発生したものが野々市町菅原に飛来したと思われる。

石川県理科教育センター (1969) は「羽化したものと思われる」とし、武藤 明 (1971) は「奇異という外ない」としたのは、卵や幼虫、蛹という確たる証拠が発見されなかった為と思われる。

《まつい まさと 〒920-01 金沢市大場町東871-15》

ちらをにらんでいる。通り過ぎようすると「オイ」と呼ばれた。「ヤバイ」と思ったが、その声には聞き覚えがあった。声の主は、花粉症で悩む松井氏だった。

鴨池プロジェクト始動

ラムサール条約登録湿地

「片野の鴨池」、五ヘクタールの水面に数万の雁鴨が越冬する野鳥の楽園。これだけでも十分興味がそえられる。十年前にはタガメもいたと聞けば、池に入るのが楽しみ。

秘密兵器は動きが活発

最近活発な動きを見せる秘密兵器一号、夜中に名古屋から帰ったかと思えば、翌日は早朝から糸魚川は葛葉峠へ。飯田、江崎の若手を連れ、エゾエノキの材採集。ヨコヤマは採れたが、クビアカメダカは入っているかどうか。

春の日の悩めるオジさん

ギフの市村集めにのめり込んだ指田氏、一シーズンにで

きるだけの産地を落そうと張り切っている。ギフの発生は約二か月、毎日採集に行く訳にもいかず、この間にいくつの産地を落すかが問題となる。しかも完品が採りたい。典型的な山雪となった今年、明日は新潟それとも赤谷、などと青年の如く悩む氏であった。

オオムツボシタマムシだ

「成虫がザクザク」と、いつもの調子で名古屋の某N氏に乗せられた秘密兵器一号二号、三号を誘って夜中に金沢を出発。現地で御神木を見、近縁種でナタを振るうと、オタマジヤクシのような頭でつかちの幼虫がポロポロでたが成虫はいっかな出てこない。N氏お得意の怪しい話だったが、幼虫はたくさん採れた。

オオズナガゴミムシの新種

白山や医王山で採れていたオオズナガゴミは、前々から新種と噂されていたが、この度ウエダオオズナガゴミムシの名で記載された。

鴨池でライトトラップ

五月十七日、鴨池でダブルライト。月齢はピツタリだったが、天気が良過ぎて冷え込みがきつく、思った程の飛来はなかった。それでも県内に三頭しか記録のないフチムラサキが、三頭も飛来した。

次はヤノコモンタマムシだ

アオマダラ、オオムツボシとタマムシ熱が広まる中、一号二号はヤノコモンに目を付けた。今なら採れると「よいこの虫屋」を募り岡山へ攻め込む計画を立てている。

例会の記録

四月四日(木) 八時から城南管工二階にて開催。

寒波でギフチョウの発生が遅れている為か、四月にしては集まりが悪かった。

今回は、①自然史博物館設立総会の代議員選出、②同総会での展示即売会、③五十万円の活動助成金、④会誌の謹呈について。①は指田氏、②

は松井、高田の両氏で、③は指田氏が応募、④はまたまた次回持ち越しになった。

その後の雑談では、小浜へタケウチの材採集に行くと言う井村会長が、巧みにアオマダラ採集に誘われていた。

参加は谷口、井村、中西、松井、指田、徳本、飯田、江崎(TEL参加)の八人。

例会の記録

五月九日(木) 八時から城南管工二階にて開催。

連休の成果や甲虫グループの動きが気になってか、二桁の人数が集まった。

話はオオクワガタ、ゲンゴロウ、タマムシ、フンチュウと甲虫中心で進み、虫研のオオクワ採集案内やオオクワの材見本が注目を集めた。未確認ながら県内にはオオクワの記録があるので、メンバーはかなりくすぐられていた。

参加は竹谷、西原、指田、徳田、飯田、井村、中西、松井、富沢、山岸、久慈の十一人。

会員の動き・しゃぼの動き

一番ギフは三月二十日
一番ギフハンターの松田氏、
遊泉寺で一番ギフをカメラに
納めた。三月二十日と一番ギ
フは早かったが、その後の寒
波で後が続かず、十日程足踏
みする事になった。

ラベルに凝る パートニ
地名や日付じゃなく、今回
は採集者にこだわる話。例え
ば手塚治虫、鳩山邦夫等のラ
ベルはすごいだろうし、家族
や親戚一同のラベルがそろっ
ているのも楽しい。そういえ
ば、蝶研の小路氏は美人ラベ
ルを集めているらしい。

アオマダラタマムシだ！
小松市立博物館でそれを見
た同じ頃、インセクタリウム
にタマムシの採り方が載った。

「採れるかも」と思ってい
た所へ、「アオマダラ採っ
ちやった」とNハタから連絡
が入った。まるで誰かが御膳
立てしてるかのようなだった。
早速秘密兵器を繰り出したの
は言うまでもなく、採集に
至ったのも言うまでもない。

文教会館で展示即売会
四月十四日「石川県に博物
館を作る会」の発会式があり、
同時に自然系団体の展示即売
会も開かれた。キノコ、野鳥
クジラ、巨樹等に交じって蝶
談会も参加し、昆虫パネルに
人気が集まった。

笹岡の案内人
福井は金津町笹岡へ、ギフ
チョウ採集に行った。林道を
歩いていると、突然現れたオ
ジさんに「火には気を付けて」

と注意された。「ギフチョウ
を捜しているんです」と八十
八箇所を見せると、「採れる
所へ案内するよ」とポイント
まで連れてってもらった。道
すがら「息子の本で来たのに
採れなかったら申し訳無い」
等と言う。よくよく話を聞け
ば、三上氏の父上だった。

チョータローが網を振った
金沢は窪周辺、あのチョー
タロー氏がネットを振った。
未だに網を振るのかと思っ
ていたが、金沢のギフは彼に
ネットを振らしめたのである。
しかもスーツ姿の氏に。

マスクをした怖いオジさん
赤谷へギフチョウ採集に
行った。入口にロープが張っ
てあり進入禁止になっていた
が、簡単に開いたので中に入
ると、車が一台だけ入ってい
た。ポイントを捜して歩いて
いると、林道の先にマスクを
した怖そうなオジさんがいた
目があわなないように道の反対
側を歩いていくと、じつとこ

翔

NO. 120

1996年6月10日発行

百万石蝶談会

金沢市大場町東871-15 松井方

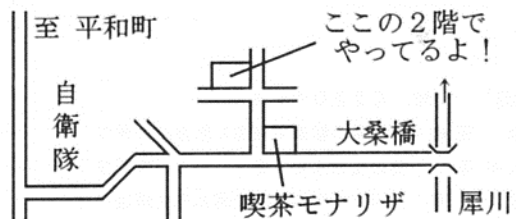
〒920-01 ☎0762-58-2727

郵便振替 00750-8-562

印刷 小西紙店印刷所

例会は偶数月・5月・7月の第1木曜8時から

TEL参加もOKです(0762-44-3318)





カバマダラは、石川県小松市で発生した。この種は、日本固有種で、主に本州中部から九州にかけて分布している。その特徴は、翅の裏面に黒い斑点があることである。また、幼虫は、主にアブラナ科の植物を食料とする。この種は、近年、分布域が拡大していることが観察されている。これは、気候変動や人間の活動による影響が考えられる。今後の調査により、その分布域の拡大がさらに進むかどうかを確認する必要がある。

カバマダラの発生は、石川県小松市で発生した。この種は、日本固有種で、主に本州中部から九州にかけて分布している。その特徴は、翅の裏面に黒い斑点があることである。また、幼虫は、主にアブラナ科の植物を食料とする。この種は、近年、分布域が拡大していることが観察されている。これは、気候変動や人間の活動による影響が考えられる。今後の調査により、その分布域の拡大がさらに進むかどうかを確認する必要がある。

目次（120号）

森 正 俊：石川県小松市で発生したカバマダラ	1
松 井 正 人：石川県押水町で発生したカバマダラ	4
富 沢 章：カバマダラの飛来要因と発生経過を語る	9
松 井 正 人：1969年に採集されたカバマダラについて	12
編 集 部：会員の動き・しゃばの動き	14